

石原慎太郎・大江健三郎・開高健の登場

田 口 律 男

一 閉塞・暴力・性

戦後一〇年を経て、日本は、急速に「戦後」的枠組み（パラダイム）から脱却しようとしていた。「もはや『戦後』ではない」（『経済白書』一九五六年）の言葉に象徴されるように、政治・経済的には、六全協による共産党の革命神話の崩壊、自民・社会の五五年体制の始動、高度経済成長への機運などによって、まさしく新しい時代の幕開けを迎えようとしていたのである。こうした時代の転換点において、文学もまたひとつの季節を開こうとしていた。もちろん、個々の文学的個性の出現に直接の因果関係は存在しない。しかし、それらは望むと望まざるとにかかわらず、モノ・コト・ヒトの交通空間のなかに囲繞されており、その関係性から無縁ではなかった。ここでは、石原慎太郎^①・大江健三郎^②・開高健^③の諸テクストを戦略的に横断し、文学史という物語を

紡いでみよう。その際、キーワードになるのが、〈閉塞と暴力と性〉である。〈閉塞〉とは、この繁栄の時代を表象するのにふさわしくない言葉のように見えるが、繁栄と閉塞とは矛盾しない。むしろ、「戦後」の混沌が秩序化され、社会が安定した体制（もう一つのパラダイム）に組成されつつあるプロセスに於いて、逆説的に小さな差異が隠蔽され、一義的な価値の支配する閉塞状態が現象したと考えられるのである。大江健三郎の言葉を借りれば、「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態」（『死者の奢り』後記、一九五八・三、文芸春秋新社）となるが、この〈閉塞〉状態に生きること之余儀なくされた人間の身体感覚が、〈暴力〉や〈性〉の徴表を通して追究されるところに時代の共通分母を見てとることができるのである。

二 石原慎太郎

まだ無名の、文学的にはほとんど素人に近い一学生の書き上げた短編が、文壇の騒擾のみならず広範な社会現象を引き起こし、その著者を時代の寵児に祭り上げていった経緯には、先に述べたポスト「戦後」という時代状況のほとんど全てが凝縮されていた。石原慎太郎の「太陽の季節」³には、単に青春の無軌道ぶりが描かれていただけではなかった。何よりもそこには、若者の行動の自由を保証する経済的余裕や社会的理念・規範（モラル）の変容といった事情が反映していた。それらなしには、「自分が一番したいことを、したいように行ったか」という彼等の行動原理や、「ナイトクラブ」・「別荘」・「ヨット」といった解放区への行動圏の拡大はなかったに相違ない。しかし、注意しなければならないのは、そうした自由と繁栄を謳歌するかに見える若者達の身体が、必ずしも見かけ程自由でも豊かでもなかったということだ。むしろそれは不如意な鬱屈を抱え込み、苛立たしく足掻いているようにさえ見える。

竜哉が強く英子に魅かれたのは、彼が拳闘に魅かれる気持ちと同じようなものがあった。

それには、リングで叩きのめされる瞬間、抵抗される人間だけが感じる、あの一種驚愕の入り混じった快感に通じるものが確かにあった。

この冒頭の一節には、性愛（エロス）とスポーツとを同質のものと身体感覚が働いているだけでなく、主格の

不在といった言説のゆれに起因する奇妙な振れのようなものが内在している。「叩きのめされる」・「抵抗される」といった受け身表現に、「対象による自己否定による生命の充実感」（磯田光一「解説」、『日本の文学』、一九六八・二、中央公論社）を見る向きもあるが、むしろここには、限定された閉鎖空間（リング）に於ける、叩きのめし抵抗される身体と叩きのめされ抵抗する身体との主・客の融解したエロスの癒合を見いだすことができる。つまり、外部から閉ざされた空間にあって、交換（交感・交歓）する身体（「暴力」性は、わずかのタイムラグを孕みつつ異化しあい、次第に同一化へと収斂しようとする。しかし、それは、差異の消失と共に飽和を迎え、エロスのポテンシャルを低下させてしまうのである。「部屋の英子がこちらを向いた気配に、彼は勃起した陰茎を外から障子に突き立てた。障子は乾いた音をたてて破れ、それを見た英子は読んでいた本を力一杯障子にぶつけたのだ。」「人間にとって愛は、所詮持続して燃焼する感動では有り得ない。それは肉と肉とが結ばれる瞬間に、激しく輝くものではないだろうか。人間は結局、この瞬間に肉体でしか結ばれることが無いのだ。」——発表当時、世間を騒然とさせたこれらの言説も、結局のところは、如上の〈閉塞・暴力・性〉の力学を説く生硬なメタフィジックに過ぎなかった。外部を喪失した内閉する空間に於いて、人間の身体感覚（性）だけを唯一の

廻り所に、自他を見いだそうとしつつ、結局は両者とも喪失するしかなかった苛立ちがこのテキストには露呈しているのである。こうした視座に立てば、芥川賞受賞に際し、文壇内外に沸き起こった賛否両論の論争も、年間二六万七六〇〇部を売りつくしたジャーナリズムの盛況も、「偵太郎刈り」・「太陽族」といった風俗の流行も、所詮は、ポスト「戦後」の繁栄の予感に浮かれた前夜祭的熱狂^{アンチフェス}といった観がなきにしもあらずである。石原慎太郎自身は、その後も、時代の寵児として活躍の場を拡げていくが、「処刑の部屋」や「亀裂」に典型的なように、いずれのテキストの深層にも横たわっているのは、死と虚無の淵にたたずむ生^ニ性の純粹情熱への傾斜であり、それが飽和・インポテンスに取り込まれた時、「太陽の季節」は終焉を迎え、政治の季節に突入していく。

三 大江健三郎

外部の抑圧を知らない〈閉塞〉の内部に住まう身体は、若さ故にもてあまし気味の〈暴力〉と〈性〉の自家中毒に苦しまねばならなかったが、外部の圧力に過剰に感応する身体は、同じく「閉ざされた壁」のなかに生きることを余儀なくされつつも、常にその〈閉塞〉空間を屈折しつつ受肉しなければならぬし、〈暴力〉や〈性〉のベクトルも

内攻するが故に多義的なイメージの回路を獲得していく。大江健三郎は、実験用犬の撲殺に携わるアルバイト学生の姿を描いた「奇妙な仕事」⁸によって登場した。

犬たちは極めて雑然としていた。ほとんどあらゆる種類の犬の雑種がいた。(中略)どこが似ているのだろうな、と僕は思った。杭につながれて敵意をすっかりなくしているというところか。きっとそうだろうな。僕らだってそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。(中略)僕は政治をふくめてほとんどあらゆることに熱中するには若すぎるか年をとりすぎた。僕は廿歳だった。僕は奇妙な年齢にいたし疲れすぎていた。

「杭」に繋ぎとめられ、「閉ざされた壁」の中に「監禁」され、撲殺されるのをただ待つだけの牙を抜かれた犬たち、それは、そっくりそのまま「僕ら」の姿に重なってくる。ここにも、〈閉塞〉の色彩は濃い。しかし、「僕」の認識のベクトルは、「壁」の内側だけでなく、それを取り囲んでいる外部のシステムにも延びていることに注目したい。彼は、安易な抵抗や闘争ではこの「壁」が破れないことを知悉している。しかし、それは、外部の圧力が強固すぎるからではない。端的に言えば、自身の内部にそれと

同じ原理（力の論理）が潜んでいるからだ。撲殺のプロである「犬殺し」の「卑劣さ」は、「生活意識の根底で極めて場所を得ている卑劣さ」であり、「非難されるべきではない」と言う。つまり、「生活意識の根底」には、生きるための闘争の論理が据えられており、安易な観念やイデオロギーではそれを変改することはできないのである。そしてその闘争の論理に、「僕」自身も身を染め、時には、それを身体の内側から発動させる可能性があるのだ（事実、「僕」は、「棒」を振り下ろし、無抵抗の犬を撲殺するに及んでいる）。この内なる〈暴力〉性は、石原慎太郎のそれとは微妙に異なる。なぜなら、石原の場合は、単に〈閉塞〉を打ち破るための純粹行為としてのそれであったが、大江の場合は、自らの身体内部に巣くう外部の抑圧力と同質の力としての〈暴力〉が捉えられているからだ。同じく力の論理であるなら、外部の〈暴力〉の方が強大であることは自明である。その時、内なる〈暴力〉は、〈閉塞〉を打開するエネルギーを持ち得ず、屈折を余儀なくされる。〈閉塞〉を嫌悪しつつ、〈閉塞〉の内部に蹲りつづけなければならず、始終、執拗な疲労・自虐・自慰に纏わりつかれ、そこから脱出することはできないのである。「僕らは、粘液質の厚い壁の中に、おとなしく暮らしていた。僕らの生活は、外部から完全に遮断されていて、不思議な監禁状態にいたのに、決して僕らは、脱走を企てたり、外部の情報を

聞きこむことに熱中したりしなかった。僕らには外部がなかったのだといっている。壁の中で、充実して、陽気に暮らしていた。」（他人の足）——この「粘液質の厚い壁」の中の〈閉塞〉空間は、〈性〉的空間でもある。もちろん、ここでのエロスのありようも、石原慎太郎の「障子」を突き破るような純粹行為としてのそれとは異質である。なぜなら、〈性〉は〈暴力〉と同様、深く内攻し、自らの「粘液」にまみれるような自慰行為としてしか発動しないからである。しかし、大江は、そうした *rebellious* な〈閉塞・暴力・性〉のありように、自らの文学的立場を賭けようとしたふしがある。内なる〈暴力〉性のシンボルとして振下ろされる〈棒〉は、黒人兵の頭蓋と少年の左掌を打ち砕く「鉦」（「飼育」）として、また無垢の象徴としての弟の子犬を撲殺する「檜」の棒（「芽むしり 仔撃ち」）として様々に変奏されるし、内攻する〈性〉も、「彼の汗ばみ粘つく牀に僕の背と尻が密着し、怒りのように熱い交流が僕らをそこで結びつけるのを感じた」（「飼育」）とあるように、抑圧されるが故に対象喪失のエロスへと耽溺していく身体感覚として、執拗に反復されていくのである。

四 開高健

三人のなかで、「戦後」の貧困・飢餓を最も深く通過し

たのは、年長者の開高健であつたろう。学生の身分で文学界に登場した前二者に対し、妻子を抱え寿屋（現サントリ）の宣伝部に身をおく勤め人であつた開高は、同じく〈閉塞・暴力・性〉の基調低音を奏でながらも、微妙な不協和音をそこに混入させることになった。それは、一言でいえば、徹底した現実認識ということになる。開高のデビュー作となつた「パニック」¹²は、一二〇年ぶりに実を結んだササの「因果律」（自然界の摂理）がもたらすネズミの大量発生と、それに振り回される人間社会の構造的な「恐慌」とを、官僚機構の末端に位置し、事態收拾に奔走する主人公を配することで、ダイナミックに描きあげた。

「集団のエネルギーは暗く巨大で、狂的でもあれば発作的でもある。」——ササを食ひ尽くし、飢餓状態に陥つたネズミの大量発生は、「地下の王国」から溢れだし、人間社会に暴威をふるい始める。一方、下っ端役人である「俊介」は、「垂直体系」からなる県庁の「ピラミッドの重圧」によつて、身体をがんじがらめにされている。共に〈閉塞〉状況に拘引されているわけだが、ネズミがその摂理に反することなく暴発し、最期は、湖に消えていくのに対し、「俊介」は、〈閉塞〉のなかで「最小のエネルギーで最大の効果」をあげる「ミニ・マックス戦術」に憂き身をやつしている。しかし、彼には、ネズミの最期を目のあたりにし、「巨大で新鮮な無力感」を覚えるといった隠された一面が

潜んでもいる。官僚機構という名の〈閉塞〉空間にがんじがらめになり、深い「倦怠」に襲われながらも、暴発することなく徹底した現実認識とバランス感覚によつて組織の力関係を綱渡りしていきながら、一方で、そうした〈閉塞〉状況そのものを根底から揺さぶる〈暴力〉のエネルギーにも鋭く感応する、そうした面従腹背とも呼ぶしかない生のスタイルがここには貫かれており、こうした構造は、「裸の王様」¹³等にも通底するものである。また、これらのテキストに於いて、〈性〉の要素が希薄なのは、いま述べた生のスタイルがある意味で安定したものであるからだろう。換言すれば、開高のテキストに於いては、〈性〉が〈閉塞〉からの出口として想定されていないということである。しかし、開高が〈性〉を全く描かなかつたということではなく、「日本三文オペラ」¹⁴では、大阪砲兵工廠跡の泥棒部落の猥雑な生（性）態を描破している。ただし、ここでの〈性〉は、あくまでも〈食〉と同次元の本能的な生理的現象として捉えられている点で、石原・大江とは異質だし、テキストから浮き彫りになってくるのは、ここでも、国家的秩序から逸脱し闘争（逃走）し続ける「アパッチ族」の「集団のエネルギー」の方なのである。

五 「戦前」の始まり

こうして見てくると、戦後一〇年を経て、新しく生まれ出ようとしていた文学的個性は、ポスト「戦後」の安定と繁栄の予感とは裏腹に、〈閉塞・暴力・性〉といった相互に連関しあう問題群を共通して内包していたことが理解される。そして、これは、ポスト「戦後」体制そのものが持った二重性に起因すると考えられる。「戦後」すぐに始まった東西冷戦構造という名の世界の再編制、その潮流に呑み込まれた日米安保条約の締結に象徴される政治（闘争）の季節の到来は、目前に迫っていた。とすれば、「戦後」は終わったのではなく、あらたな戦争への「戦前」が始まろうとしていたのではないか。その意味で、ここで概観した諸テクストは、「戦後」ではなく「戦前」をミメーシスするものであったのかもしれないのである。

注(1) 石原慎太郎(一九三二)

小説家・政治家。「太陽の季節」で、第三四回芥川賞受賞。一九六八年、参議院選挙全国区に自民党から出馬。トップ当選を果たして以来、一九九五年まで小説家と政治家の二足のわらじをはきつづける。

(2) 大江健三郎(一九三五)

小説家。「飼育」で第三九回芥川賞受賞。サルトルに傾倒し、実存主義傾向を深めるが、頭部に障害をもった長男誕生とヒロシマ探訪とを契機に、核状況下の魂の救

済の問題に踏み込む。一九九四年のノーベル文学賞受賞。

(3) 開高健(一九三〇—一九八九)

小説家。「裸の王様」で第三八回芥川賞受賞。戦後の貧困時代に様々なアルバイトを体験し、「パニック」で作家として認められた。ベトナム戦争のルポルタージュに挑戦するなど、社会派・行動派の一面を持つ。

(4) 「太陽の季節」

一九五五年七月、『文学界』に掲載。第一回『文学界』新人賞と第三四回芥川賞を受ける。毀誉褒貶の渦に巻き込まれ、いわゆる「太陽の季節」論争を引き起こした。また、この出現が、ジャーナリストの隆盛による文壇の崩壊を印象づけた。

(5) 論争

芥川賞選者では、「快楽」の追究を積極的に肯定する舟橋聖一と「美的節度の欠如」を指摘する佐藤春夫との間で評価が真っ二つに分かれた。これは更に二人のいわゆる享楽論争、派生して亀井勝一郎と中村光夫との賭博性論争に発展した。またPTAや教育関係者からの非難も殺到した。

(6) 「処刑の部屋」

一九五六年三月、『新潮』に掲載。極限の暴力(リンチ)と受苦のドラマを通して、「死に甲斐のある何か」を手探りする姿が描かれている。

(7) 「亀裂」

一九五六年十一月—一九五七年九月、『文学界』に連

載。その主題は、「現代に於ける純粹行為の可能性」、「現代に於ける人間の繋り合いの可能性、言い換えれば恋愛に於ける肉体主義の可能性」、「現代に於ける教養の可能性」(あとがき)とある。

(8) 「奇妙な仕事」

荒正人の選により、五月祭賞受賞。一九五七年五月、『東京大学新聞』に掲載。その後、平野謙が『毎日新聞』の文芸時評で高く評価し、作家大江が誕生した。

(9) 「他人の足」

一九五七年八月、『新潮』に掲載。脊椎カリエス病棟の閉空間で、いったんは外部と接触し「誇り」を回復しかけるが、再び淫靡な性的快楽に耽っていく少年達の姿を描いた。

(10) 「飼育」

一九五八年一月、『文学界』に掲載。第三九回芥川賞を受ける。捕虜となり村で飼育される黒人兵と子供達との言葉を媒介しないが故の身体的な交流とその挫折を描いた。

(11) 「芽むしり 仔撃ち」

一九五八年六月、『群像』に掲載。疫病の流行で置き去りにされた感化院の少年達が自らの手で少年の王国を築こうとするが、パニックから内部崩壊し、更に村人によって抑圧されていく姿を描いた大江の最初の長編。

(12) 「パニック」

佐々木基一の紹介で、一九五七年八月、『新日本文

学』に掲載。平野謙がこれを『毎日新聞』文芸時評で激賞、これによって開高は、作家としての地歩を固めた。

(13) 「裸の王様」

一九五七年二月、『文学界』に掲載。大江の「死者の奢り」と競って、第三八回芥川賞を受ける。子供を抑圧する家族・教育界・実業界・官僚界のからくりを重層的に描いた。

(14) 「日本三文オペラ」

一九五九年一月〜七月、『文学界』に掲載。佐伯彰一は「限りなく嗜好的でありながら、同時に高らかな哄笑を忘れない、喜劇的な散文」(新潮文庫版解説)と評した。

付記

本稿は、本来、有精堂より刊行予定の『時代別日本文学史事典 現代編』の求めに応じて書かれたものだが、出版社の諸事情により発刊が難しくなったため、ここに転載することになったものである。このことは、編集部も了解済みである。本稿の記述のスタイルが、筆者の従来のそれとやや異なるのは、そうした事情による。故湯之上早苗先生とは、よく大学近くの喫茶店で、執筆中の原稿の内容を巡って、あれこれとお話させていただいたものであった。この片々たる原稿にも、そうした個人的な思い出がたくさんまつまっている。御霊前に捧げるには、あまりにも微力なものだが、故人は、それを笑って許して下さるものと考え。私は、最後まで、故人に甘えつつけであった。